

生きるために読書を

デンマーク社会にみる文学普及の一つの取り組み

海外交流

田 邊 欧*

Read for Your Life:

An Approach to spread Literature in Danish Society

Key Words : literature, social inclusion, Danish society

1. はじめに

国境・人種・ジェンダー・家族構成などさまざまな枠組みが大きく変わりつつある現代社会において、文学の存在意義や、文学の持つ力が改めて問われている。文学が持つ大きな力として、今こそフィクションの世界を提示することにより、世代、地域、民族、立場を違える人々が互いの背景を超えた共有・共感を生み出すこと、現代社会の多様で複雑な諸問題について共通して考えるための土台を構築することが求められていると思う。フィクション「虚構」のなかにこそ、「現実」が描かれていると常日頃感じているからだ。

しかしながら文学が一般社会に普及されるには、テキスト自体の豊かさだけでは十分ではない。デンマークでは、文学の力の増強・普及には、社会包摂機能への意識を高めることが大きく関与している。本稿では文学が現代のデンマーク社会にどのように普及されているのか、文学だけには限らないが、本と人を繋ぐ特異な取り組みを紹介したいと思う。

2. プロジェクト“Read for your life”（「生きるために読書を」）

私は、ここ数年、多元社会における文学の立ち位置をデンマークの社会包摂の実情に照らし合わせて検証することを研究テーマにしている。わかりやす

く言うと、文学がデンマークの社会にどのようなかたちで普及され、市民にどのように受け入れられ、どのような影響を及ぼしているのか、文学（フィクション）の力はいかなる場をとおして強められるのかという問いと向き合っている。最初はその検証を主に二通りの方法、〈①図書館や教育機関を通して、子どもや一般市民に文学が届けられる形態を調査する②文学が他の芸術ジャンルやメディアとコラボレーションした例を分析する〉ことから考察しようとしていた。ところが、まったく思わぬ普及のかたちがあることに巡り会うことになったのだ。そのきっかけを与えてくれたのが、大阪外国語大学時代にデンマーク語を勉強した卒業生沢広あやさんである。彼女は学部時代にデンマークの教育制度に興味を持ったことが契機となり、大学院に進み、さらにデンマークの教育大学で学びを深め、デンマークに居住して20年になる。デンマークで図書館司書の資格も取り、公立図書館の司書、小・中学校の図書館司書を経て、現在は児童書専門書店で働きながら、デンマークの社会の有様をさまざまな側面から発信するフリーランスの仕事でも活躍している。彼女から、調査対象のヒントを得ようと思い、昨年メールで連絡をとると、とても興味深い文学普及のかたちを紹介してもらった。

その特異なかたちとは、“Read for your life”（“Læs for livet”：「生きるために読書を」）というプロジェクトだった。プロジェクトの設立経緯、および運営の実態、活動内容に関しては、ご本人の許可を得て、沢広さんが〈note〉というメディアプラットフォームで発信した記事「本の力で児童養護施設に暮らす子どもたちをサポートするプロジェクト“Read for your life”」⁽¹⁾から得た情報がもとなっ



* Uta TANABE

1960年1月生まれ
デンマーク・コペンハーゲン大学大学院
北欧語研究科・第2課程中退（1991年）
現在、大阪大学 人文学研究科
外国語専攻・デンマーク語
教授 Exam.art.
専門／北欧文学

⁽¹⁾ https://note.com/sawaguri_cph/n/n49f018d01efb

ている。私自身も現場を訪れ、彼女から説明を受けて感じたこと、考えたことを加えながらまとめてみたい。

このプロジェクトは、もともと Rachel Röst（ラーケル・ルスツ）さんという一人の女性が2012年に始めた小さな個人的活動だった。自身の養護施設で暮らした経験を振り返り、当時本の存在が彼女の人生において何ものにも代えがたい救いとなったことから、自分と同じような境遇の子どもたちにも、「本がもたらしてくれる命のサポート」を届けたいという思いで、活動を始めたそうだ。現在では非営利団体として、数人の専属スタッフと数多くのボランティアによって運営され、さらに大小様々な出版社や書店も協力し、大型の投資ファンドもスポンサーになっているという。沢広さんもボランティアの一人として月1〜2回、児童書担当としてジャンルごとの仕分け作業に関わる。

実際に昨年の9月、私は沢広さんに特別にお願いして、休日の日に活動拠点である図書室「生きるために読書を」を案内してもらった。場所はコペンハーゲン市内で、昔からのアパートが建ち並ぶウスタブローという地区の一画だった。その中の一棟のアパートの半地下部分が図書室だ。かなりの広さ（347平米）と蔵書数（約8万冊）にまずびっくりした。入り口は1階部分で、そこから数段階段を降りると、右側に子どもが本をソファに寝転びながら読めるような、ファンタジー世界を彷彿とさせる居心地の良い空間がしつらえられている。小さいけれど、秘密の隠れ家のようなとても素敵な場所だ。その部屋を過ぎると、左手にカウンターが目に入る。ここに、コペンハーゲン市内、市外、そしてデンマーク全国から寄贈される本が受け付けられる。寄贈本は図書館、出版社、書店などを通して届けられるという。個人が本を寄贈する場合は、公立図書館の中にこのプロジェクト用に備えられた本棚が用意されており、そこに本を届けるらしい。カウンターの奥には何十連もの書架が並ぶ。両側の書架を挟んで作業台が置いてある。そこで、その日に、あるいはその週にどこに、どの本を選び、送り届けるのかという作業がタスク表に基づいてボランティアたちを中心に進められる。

私が驚いたのは、日本であれば普通寄贈されるのは、本の買取りで売れない本、引越しなどで不要に



図書室「生きるために読書を」入り口（田邊撮影）



図書室「生きるために読書を」子ども読書部屋（田邊撮影）



図書室「生きるために読書を」のなかでの本の仕分け作業（沢広あや提供）

なくなった本、もう読まれなくなった古い本、興味がなくなった本、でも捨てるには忍びない本などがほとんどである。求められる本を寄贈するのではなく、要らなくなった本を寄贈する。

しかしこのプロジェクトでは、読む当事者の希望が優先され、それに基づいて寄贈する本の収集作業と選定作業が時間をかけて丁寧に行われる。沢広さんの記事から引用すると、「たとえば、児童養護施設や療養施設から依頼を受けると（今では依頼を受けるようになったが、始めた当初は創始者のラーケルさんが売り込みに行っていたらしい）、そこへ出向き、子どもたちと直接対話をしながら、どんな本が必要かをヒアリングする。（中略）子どもたちが今、何に関心があるかは大人にはわからない。そして施設で暮らしている子どもたちは、そうでない子どもに比べて、自分の希望を聞き入れてもらえる機会が少ない。だからこそ、子どもたちの声を直接聞いて、それを活かした本棚作りをすることが大切なのだという」と、述べられている。

また本が寄贈先のどのスペースに置かれるのかにも気を配るという。本棚を、どこに置けば、子どもたちが綺麗で新しい本を手にとってみたいと思うか、またどんな場所だと本を読みたいと思うか、本や本棚を囲む「ヒュゲリ」（デンマーク語で心地よいという意味）な空間作りにも、心を砕いているということを知り、まさにここに北欧の包摂社会の一面を垣間見た気がした。

社会の誰もが取りこぼされることなく、個人の意思が尊重され、自由に生きることができる社会が包摂社会だとすれば、この取り組みは「本が持つ力」を信じ、いかなる境遇にあっても、自分自身の本と出会うことによって、自分の居場所を見つけ、自分らしく生きることをサポートするに、まさに相応し

い社会包摂のしくみといえるのではないだろうか。寄贈先は、子どもの施設に限ったことではなく、療養施設、高齢者ホーム、病院、女性のためのシェルターなどさまざまな方面に及んでいる。これまでにこのプロジェクトから各所に必要とされる本が寄贈された回数は延べ370回に上ると聞いた。しかも1回に寄贈される本数は400冊～1000冊だという。これは、本離れ、活字離れが進む現代にあって、ある意味驚異的な冊数である。

3. まとめにかえて

世界の中でもとりわけITの進歩が目覚ましく、福祉社会において、効率化と電子化のスピードが日本よりはるかに目覚ましいデンマークの社会において、図書室「生きるために読書を」の存在は、一見その流れに逆行しているようにすら見える。しかしこの図書室のプロジェクトに賛同する数多くの人がいて、公立図書館、出版社、一般書店が協力し、大型企業がスポンサーにもなり、官民が協力し合う姿は、まさに北欧の包摂社会のもう一つの側面を照射しているように思う。決して技術の進歩だけでは、真の意味における幸福な社会を築くことができないということ、そして人間の「こころやたましい」に訴えかける文学をはじめとする「本」の存在の大きさ、そして豊かさを如実に物語っている。

今、私が所属する大阪大学の箕面キャンパスには、国内でも類を見ない、市と大学の図書館が一体化した、「大阪大学外国学図書館」と「箕面市立船場図書館」が共存している。アカデミアの世界と市民の一般生活の両方において、本の存在がその架け橋となるような働きをこの先も模索し続けていきたいと思う。